

「はとバス×檜原村タイアップ企画
東京の森へ…檜原村サステナブルツアー」の概要



檜原村エコツアーガイドの案内のもと、森林セラピーロードの散策をお楽しみいただくほか、農業など地域の生産者の保護や活性化に繋げる取り組みの一つとして、檜原村で採れた山菜を使用した昼食を提供。当ツアーに使用する車両は優れた燃費と排出ガスの大幅削減を実現した、環境にやさしい大型観光ハイブリッドバス。なお、当ツアーの売上金の一部は「檜原村エコツーリズム推進協議会」に寄付し、檜原村の環境保全に活用。

かを検討しました。その中から生まれたのが「サステナブルツアー」のアイデアです。

——サステナブルツアーとしての檜原村でのツアー企画

——サステナブルツアーの舞台は檜原村のことですが、その経緯は？

実は弊社は過去にも檜原村でツアーを行った経験があり、村内の施設とのつながりもありました。檜原村は島しょ部を除き東京都で唯一の村で、都心から2時間ほどでアクセスできます。四季折々の自然が楽しめる一方、都内在住でも訪れたことがない方が多いんです。そこで以前の経験を活かしつつ、「エコリズム」という新たな視点を加えてサステナブルツアーとして企画しました。

——参加者の反応はいかがでしたか。

今年5月に1回、6月に3回、計4回実施し、すべて早期に満席となり、7月には追加開催するほど好評でした。合計208名、1回あたり40名ほどで、都内在住の方が中心。年齢層は50代〜70代、80代の方もいらつしやいました。約半数がお一人での参加というのも特徴です。

個人では行きにくい場所を気軽に訪れられることが魅力だったのだと思います。アンケートでは「楽しく癒されてリフレッシュできた」「自然が豊かで食事も美味しく、日常を忘れられた」という声が多く寄せられました。昼食は地元食材を使った地産地消の料理で好評でした。

——魅力的なツアー企画の秘訣

——地域の現場では、どのような課題を感じていますか。

やはり現地ガイドの存在は不可欠です。歴史や文化、環境を深く伝えることで、ツアーの質が決まります。ただ、高齢化や人材不足で確保が難しい地域もあります。後継者の育成や観光サービス全体を支える人材育成が必要だと感じています。また、地域側との協力も欠かせません。観光を受け入れる

——広報や集客ではどのような工夫をされたのでしょうか。

プレスリリースだけでなく、初回ツアーには新聞記者が同行し、記事が大きく掲載されました。ちょうどシカが姿を見せてくれて（笑）、その写真も使われたことで、紙面にインパクトが生まれ、多くの方の目に留まったようです。首都圏版だったこともあり、記事を見て申し込まれた方も多く、メディアの力の大きさを実感しました。さらに「秋にも行きたい」という声を受け、今年10月・11月に追加で3回ツアーを設定しています。紅葉の季節も楽しんでいただけます。また、第2弾としてエコツーリズムを推進している埼玉県飯能市でサステナブルツアーを企画しています。

——バスツアーを企画する時に大切にしていることは何でしょうか。

まずは地域資源の発掘です。その土地に行かないと見られない景色、触れられない文化、日常では味わえない体験を参加者に届けたいと思っています。地元の方にとって当たり前の自然や伝統も、外から訪れる方には大きな魅力になります。それを掘り起こして紹介することが弊社のツアー作りのDNAです。例えば、ロングランコースの例として、川崎の工場夜景ツアーがあります。観光とは縁のなかった場所ですが、その魅力を発見し、ツアーとして仕立て上げることで多くの方に楽しんでいただける体験にしています。単なる案内ではなく、現地ガイドによる丁寧な説明やストーリー性を持たせることで付加価値の高い体験にしています。

——ツアーの実践と経営の両面からサステナビリティを考えるお話とても興味深かったです。ありがとうございました。

——ツアーの今後の展望について教えてください。

バスツアーは、個人では行きにくい場所でも運転や乗り換えを気にせず直行でき、点在する地域資源を効率的に巡ることができるというメリットがあります。サステナブルツアーはまだスタート段階ですが、この利便性を活かして、参加者にとつて大きな負担なく、さまざまな体験を提供していきたいと思っています。そして、地域の方々と一緒に取り組むことで、参加者、地域、弊社すべてにとって良いツアーが実現でき、環境保全と社会貢献につながると感じています。こうした経験や取組を重ね、継続的にサステナブルツアーを提供していきたいと考えています。

——ツアーの実践と経営の両面からサステナビリティを考えるお話とても興味深かったです。ありがとうございました。

武市 玲子
1962年東京都生まれ。一橋大学商学部卒業。1986年東京都に入都し、人事委員会事務局長、生活文化局長などを経て2022年4月に交通局長就任。23年3月退職し、同年4月株式会社はとバス代表取締役社長就任、現在に至る。

株式会社はとバスは1948年創業以来、東京観光の代名詞ともいえる観光バス事業を中心に幅広く事業を展開してきた。2023年にサステナビリティ推進体制を整備し、環境保全や地域活性を軸に、2025年にはエコツーリズムに取り組んでいる東京都檜原村を舞台にした「サステナブルツアー」を企画。都心から気軽に訪れられる体験を提供し、地域資源の魅力を掘り起こすことで、参加者と地域の双方に価値をもたらす「サステナブルツアー」の取組や魅力的なバスツアー企画の秘訣について、同社の武市代表取締役社長に話を伺った。



武市 玲子氏
Reiko Takeichi
株式会社はとバス 代表取締役社長

収録日：2025年10月15日
収録場所：株式会社はとバス
インタビュアー：水谷初子
（日本エコツーリズム協会理事・事務局長）

観光バス会社の役割としてのサステナブルツアー
東京都檜原村を舞台にバスツアー
で体験するエコツーリズムの魅力



檜原都民の森 森林セラピーロードのウォーキング

サステナビリティへの取組のきっかけ

——2023年にサステナビリティ推進体制を整備された、きっかけについて教えてください。

私は2023年4月に社長に就任し、グループの企業理念や経営基本方針に沿って会社経営を進めてきました。基本方針は6項目あり、「安全最優先」「お客さま第一」「人材育成」「企業体質の強化」「環境保全」「社会的責任」です。2009年7月に刷新された年功序列ですが、理念自体は今も変わっていません。その中でも「安全最優先」と「お客さま第一」については社内に浸透していると感じていました。ただ、「環境保全」や「社会的責任」はコロナ禍の影響もあって、やや取組が弱く感じたのです。他の運輸事業者が積極的なサステナビリティの取組を進める中で、CO2を多く排出する観光バス事業者として、もっと積極的に動くべきだと思いました。



2階建てのオープンバスで東京の主要な観光地を巡るツアー

また、この基本方針はSDGsが国連で採択される前に作られたもので、理念自体は変わらなくても、世界共通の視点にアップデートする必要がある。SDGsの目標年は2030年ですので、2023年時点ですでに折り返し地点を過ぎています。残り7年という中で、改めてサステナビリティの視点を明確にし、グループ企業理念・経営基本方針に基づき取組を加速・可視化すべきだと考えました。そこで、就任から半年後の9月に社長直轄のサステナブル経営推進室を設置し、同年12月には全社横断的なサステナビリティ推進体制を整えました。

——なるほど、社長直轄の経営推進室ということですね。

はい、そうです。組織的にはシンプルですが、重要な役割を担っています。基本方針をアップデートし、2030年に向けて持続可能な経営を進めていく。これをサステナビリティ理念・基本方針として定め、各部の具体的なアクションにつなげるはたらきかけをしています。

——御社では5つのマテリアリティ*（重要課題）の中に、「環境保全・社会貢献」などを掲げていらっしゃる。サステナビリティ基本方針に基づいて、重点的に取り組むべき課題として5つのマテリアリティを設けています。このうち「お客さま満足の追求」「環境保全・社会貢献」などの課題について、弊社の主力事業である観光バス事業で何ができる